

漢文訓読のための古文文法

1 動詞

動詞

1・1 動詞の活用。

1・1・1 未然形の用法 未然形

○助詞「ば」をともなって、仮定の条件を示す。

○打消の助動詞「ず」をともなって打消を、推量の助動詞「む(ん)」をともなって推量の意を示す。

1・1・2 連用形の用法 連用形

○下の用言に続ける。

○述語として用いて、そこでことばをいったん中止する。(中止法)

○体言を作る。

○完了や過去の助動詞「たり」「き」につく。

1・1・3 終止形の用法 終止形

○述語として用いて、文の終止を示す。

○推量の助動詞「べし」につく。

1・1・4 連体形の用法 連体形

○体言をともない、連体修飾語となる。

○助詞「か」「や」などを受けて、文を結ぶ。(係り結び)

○体言に準じて用いる。→(ことば省略できる)

1・1・5 已然形の用法 已然形

○助詞「ども」「ば」をともなって、確定の条件を示す。

1・1・6 命令形の用法 命令形

○文の終止に用いて、命令の意を示す。

1・2 動詞の活用

1・2・1 サ変動詞 ^{す、おはすの二語} サ変動詞

○一字あるいは二字の動詞をサ変に活用させる。

例：悪寒す、発熱す。

- ○形容詞の連用形にサ変を接続。直くす、正しくす。これが音便となり、直うす、正

原典理由. ので 必ずしも ~と ~ (ない) 簡明. 文法文法. p.134 必要条件 ~ 係り結び 佳例(2)都

うす、となる。

例：久しうす、高うす、空しうす。

○形容動詞の連用形にサ変を接続。

例：新たにす、専らにす、つまびらかにす。

○四段活用の動詞の連用形「Vみ」にサ変を接続。

例：安んず（安み）、軽んず（軽み）、重んず（重み）、疎んず（疎み）、甘んず（甘み）、先んず、与（くみ）す。

○格助詞「に」「と」にサ変を接続。

例：器にす、枕とす。

○「より」「もって」等に接続。

例：よりす、以ってす。

語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
す	せ	し	す	する	すれ	せよ

1・2・2 **ラ変** 4 語 **ラ変**

○ラ変の動詞は、「あり」「をり」「はべり」「いまそかり」だけであるが、漢文訓読では、「あり」「をり」だけである。

語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
あ	ら	り	り	る	れ	れ

1・1・3 **上一段** 4 語 **上一段**

○上一段に所属する動詞は、十数例にすぎない。

着る・似る・煮る・干（ひ）る・見る（顧みる・試みる・惟みる・鑑みる）射る・
鑄る・居る・率る・ひきみる・用ひる・噓（はなひ）る。

○「射（い）る」「鑄（い）る」はヤ行、「居（ゐ）る」「率（ゐ）る」はワ行。
 なお、この「居る」は「居（を）り」（ラ変）とは別語である。

行	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
カ行	着	き	き	きる	きる	きれ	きよ
ナ行	似	に	に	にる	にる	にれ	によ
ハ行	嚏	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
マ行	見	み	み	みる	みる	みれ	みよ
ヤ行	射	い	い	いる	いる	いれ	いよ
ワ行	居	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ

1・2・4 ~~四段~~ 多段 四段

行	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
カ行	書	か	き	く	く	け	け
ガ行	泳	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
サ行	貸	さ	し	す	す	せ	せ
タ行	打	た	ち	っ	っ	て	て

ハ行	買	は	ひ	ふ	ぶ	へ	へ
バ行	飛	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
マ行	読	ま	み	む	む	め	め
ラ行	乗	ら	り	る	る	れ	れ

1・2・5 ~~上二段~~ ~~多ぬ~~ 上二段

行	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
カ行	起	き	き	く	くる	くれ	きよ
ガ行	過	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ
タ行	落	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
ダ行	打	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ
ハ行	用	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
バ行	伸	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	びよ
マ行	恨	み	み	む	むる	めれ	みよ
ヤ行	悔	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ

う行	下	り	り	る	るる	るれ	りよ
----	---	---	---	---	----	----	----

1・2・6 **下二段** ^{下二段} ^{「う」で落ち着が悪い} ^{完了の助動詞をつける(時と場合による)}
 (得た) ^{完了の助動詞をつける(時と場合による)}

行	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ア行	え 得	え	え	う	うる	うれ	えよ
カ行	う 受	け	け	く	くる	くれ	けよ
ガ行	な 投	げ	げ	ぐ	ぐる	ぐれ	げよ
サ行	よ 寄	せ	せ	す	する	すれ	せよ
ザ行	ま 交	ぜ	ぜ	ず	ずる	ずれ	ぜよ
タ行	す 捨	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ダ行	い 出	で	で	づ	づる	づれ	でよ
ナ行	か 兼	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ
ハ行	経	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へよ
バ行	の 述	べ	べ	ぶ	ぶる	ぶれ	べよ
マ行	と 止	め	め	む	むる	むれ	めよ

な ぬ ぬ ぬ ぬる ぬれ ぬよ

ヤ行	こ 越	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
ラ行	なが流	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
ワ行	う 飢	ゑ	ゑ	う	うる	うれ	ゑよ

1・2・7 **ナ変** **ナ変** **又読**

○ナ変の動詞には「死ぬ」「往ぬ」だけであるが、ともに訓読には用いない。「死ぬ」はサ変「死す」、四段「往ぬ」は「往く」と読む。

1・2・8 **カ変** **カ変**

○カ変は「来(く)」(一語である。「来」は、四段「きたる」と読み、訓読では使用しない。

1・2・9 **下一段** **下一段**

○下一段は「蹴る」(一語である)。

語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
蹴る	け	け	ける	ける	けれ	けよ

1・3 **動詞活用の見分け方**

○ナ変・カ変は訓読では使用しない。

○下一段は、「蹴る」一語である。

○訓読で使用するラ変は、「あり」「をり」だけである。

○上一段・下一段・カ変・サ変・ナ変・ラ変以外は、打消しの助動詞「ず」をつけてみる。口語では「ない」をつけてみる。

「書かず(書かない)」のように、ア段に「ず」のつくものは、四段活用。

「起きず(起きない)」のように、イ段に「ず」のつくものは、上二段活用。

「受けず（受けない）」のように、エ段に「ず」のつくものは、下二段活用。

2 形容詞

形容詞

○形容詞には、ク活用とシク活用がある。

○それぞれの連用形「く」にラ変動詞「あり」をつけ熟合したものが二段に表記される、カリ活用である。

○一般に、名詞・助詞につく場合には、ク活用・シク活用ともに一段目の活用を使用する。「楽しきこと」「楽しくんば」「楽しくして」「楽しければ」

助動詞につく場合には、ともに二段目のカリ活用を使用する。「楽しからん」「楽しからずや」「楽しかりしとき」「楽しかるべし」

種類	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ク活用	よ	く から	く かり	し	き かる	けれ	かれ
シク活用	ただ	しく しから	しく しかり	し	しき しかる	しけれ	しかれ

3 形容動詞

形容動詞

○形容動詞という品詞については、議論が多く、存在を否定する人達も少なくない。

また、漢文自体には、形容動詞は存在しない。したがって、漢文訓読では、形容動詞という活用を認めるよりも、むしろ、「明らか」に助動詞「なり」、「堂堂」に助動詞「たり」がついたと考えるほうがよい。

○タリ活用の連用形「と」は、そのままの形では使われず、必ず「して」をとめない「堂堂として」となる。

それにたいして、ナリ活用は「して」をつけなくともよい。

種類	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ナリ活用	明らか	なら	なり に	なり	なる	なれ	なれ
タリ活用	堂堂	たら	たり と	たり	たる	たれ	たれ

助動詞

4. 助動詞

4・1 受け身

受け身

4・1・1 る・らる

[意味] 受身。「見～（～せらる・さる）」「～於～（～に～せらる）」「見～於～（～に～せらる）」

[接続] 「る」は四段・ラ変・ナ変、「らる」は下一段・下二段・上一段・上二段・サ変カ変の、それぞれ未然形につく。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ

4・2 使役

使役

4・2・1 しむ

[意味] 使役。「～使～（～は～をして～に・を～せしむ）」「命～（～に

命じて～を～せしむ) 」

[接続] 動詞・形容詞・形容動詞の未然形につく。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

4・3 回想・過去 回想・過去

4・3・1 き

[意味] 回想（過去。直接の体験など、過去の確かなことを回想する。

○この「き」は、文脈上から、補読する。

[接続] 動詞・形容詞・形容動詞・の連用形につく。

ただし、終止形「き」は、カ変にはつかない。連体形「し」・已然形「しか」はカ変につく。さらにカ変の未然形にもつく。

終止形「き」は、サ変の連用形につく。連体形「し」・已然形「しか」はサ変の未然形につく。

[注意] この「き」は、文脈上から、補読する。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
き	せ		き	し	しか	

4・3・2 けり

[意味]

(1) 回想（過去）。不確かだった過去の事がらに気づいて思い浮べたり、過去の伝聞したことを回想したりする。

(2) 詠嘆。あることに気づいて感動した気持を表す。

[接続] 動詞・形容詞・形容動詞の連用形につく。

[注意] この「けり」は、文脈上から、補読する。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
けり	けら		けり	ける	けれ	

4・4 完了 **完了**

4・4・1 たり、り

[意味] 完了・過去。「嘗～（かつて～せり）」「已・既～（すでに～せり）」

[接続] 「たり」は、動詞の連用形につく。

「り」は、四段活用の已然形と、サ変の未然形だけにつく。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
り	ら	り	り	る	れ	れ

4・5 推量 **推量**

4・5・1 む（ん）

[意味]

(1) 推量。「将・且～（まさに～せんとす）」「欲～（せんとほつす）」「無乃～乎（すなはち～することなからんか・や）」「若～～（もし～ならば、～せん）」「微～～（～なかりせば、～せん・ならん）」「～如之何（これをいかんせん）」「何～（なにをか～せん）」「何時～（いずれのときにか～せん）」「蓋～（けだし～せん）」「或～（あるいは～ならん）」「恐～（おそらくは～ならん）」「庶幾～（～するにちかからん）」「不然～（しからずんば～せん）」

(2) 意志。「将・且～(まさに～せんとす)」「欲～(～せんとほつす)」「得～(～するをえん)」「請～(こふ～せん)」「願～(ねがはくは～せん)」「庶幾～(こひねがはくは～せん)」「寧～安能～乎(むしろ～とも、いづくんぞよく～せんや)」

(3) 適当・当然。「寧～(むしろ～せん)」

[接続] 動詞・形容詞・形容動詞の未然形につく。

[注意]

○已然形の「め」は、漢文訓読では使用しない。

○一般に漢文訓読では「ん」と書かれる。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
む (ん)			む (ん)	む (ん)	め	

4・5・2 べし

[意味]

(1) 可能。「可～(すべし)」

(2) 当然・適当。「当～(まさに～すべし)」「宜～(よろしく～すべし)」

[接続] 動詞の終止形、ラ変・形容詞・形容動詞に連体形につく。

[注意]

○未然形につく仮定の助詞「ば」は、「べく」につき、「べくば」は「べくんば」に変化する。「べければ」は使用しない。

○未然形につく打消の助動詞「ず」は、「べから」につき、「べからず」となる。

○未然形「べけ」は、推量の助動詞「む」に接続する場合にのみ使用し、「べけん」となべる。反語に使用される「可～乎(べけんや)」である。反語以外には使用しない。

○已然形「べけれ」に、接続助詞「ども」をつけた「べけれども」は使用しない。逆

接には、連体形「べき」に接続助詞「に」をつけ「べきに」とする。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
べし	べく べから べけ	べく べかり	べし	べき べかる	べけれ	

4・6 打消 打消

4・6・1 ず

[意味] 打消。

[接続] 動詞・形容詞・形容動詞の未然形につく。

[注意]

○未然形「ず」に仮定の接続助詞「ば」がつく場合、「ずは」は「ずんば」となる。

「ざらば」とはならない。

確定の接続助詞「ば」につく場合には、已然形に接続し「ざれば」となる。

○未然形接続の推量の助動詞「む(ん)」につく場合には、「ざら」に「む」がつき「ざらん」となる。

○接続助詞「して」に、連用形「ず」がつき「ずして」となる。「ずて」とはならない。

○「ず」には、連体形「ぬ」、已然形「ね」があるが、漢文訓読では使用しない。

○命令形「ざれ」は、今日の漢文訓読では使用しない。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ず	ず ざら	ず ざり	ず	ざる (ぬ)	ざれ (ね)	(ざれ)

4・7 断定 **断定**

4・7・1 なり

[意味] 断定。

[接続] 動詞・形容詞・形容動詞の連体形、または体言につく。

[注意]

○推定・伝聞の「なり」は漢文訓読では使用しない。この推定・伝聞の「なり」は動詞（ラ変を除く）の終止形、ラ変・形容詞・形容動詞の連体形につく。注意が必要である。

○「ごとし」にはその連体形につかず、連用形について「ごとくなり」となる。

○助詞にもつく。「のみなり」

○「非」を「あらず」と読む場合、前につけられる「に」は、この「なり」の連用形「に」である。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
なり	なら	なり に	なり	なる	なれ	

格助詞

格助詞



4・7・2 たり

[意味] 断定。

[接続] 体言につく。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
たり	たら	たり と	たり	たる	たれ	たれ

4・8 比況 **比況**

4・8・1 ごとし

[意味]

(1) 他にたとえて言う意味。

(2) 例示。

[接続] 動詞・形容詞・形容動詞の連体形に助詞「が」のついたもの、体言に助詞「の」が付いたものにつく。

[注意] 助動詞「なり」に接続する場合、連用形で接続し「ごとくなり」となる。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき		